



視 察 報 告 書

<p>調査・研究 テーマ</p>	<p>子どもたちの第3の居場所について</p>
<p>目 的</p>	<p>NPO法人さいたまユースサポートネットが見沼区に新しくオープンした「あそぼっくす みぬま」を見学し、青砥先生よりお話を伺う</p>
<p>内 容</p>	<p>日 時：2021年5月24日（月） 10時00分～12時00分 参加者：添野ふみ子、高柳 俊哉、三神 尊志、西山 幸代、 富田かおり、佐伯加寿美、出雲 圭子 NPO法人さいたまユースサポートネット理事長：青砥 恭氏 同事務局長：青砥 祥子 氏 同プロジェクトマネージャー：小池 豊 氏 報告書作成者：三神 尊志</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
<p>概 要</p>	<p>ユースサポートネットは2011年の団体設立以来埼玉県、さいたま市、川越市、上尾市、民間財団などと連携し1万人以上を支援してきた。一番大切にしているのは「地域との協働」で、現在も「堀崎プロジェクト」として働くことに困難を抱えるひきこもりであった方を3人就労に向けてサポートしている。キャリアコンサルタントとの面談やPC講座、人とのコミュニケーション術を磨き、近隣の商店での就労体験、マルシェでの販売体験などを通して自立をサポートする事業を進めている。</p> <p>子どもの貧困が6～7人に一人と言われるなかで、さいたま市にこの貧困率を当てはめてみると、10万人の小中学生のうち約</p>

概 要

1万3500人が当てはまる。支援につながっていない隠れた辛い状況にある子どもたちがかなりいるとみられる。

ヤングケアラーは今でこそ取り上げられているが、昔からある問題。また、最近では外国人の子どもも増えており、家族間で意志の疎通が図れないことによる家族のアイデンティティーの喪失や、深い思考、悩みの共有に必要な母語がないことによる学習面の発達の遅れや孤立の問題がある。しかし、言葉の獲得がないことが問題になるのは外国人だけではなく日本人についても同様で、人間としての身体と心の発達に大きな影響を与えている。

日本財団による支援を受けた「あそぼっくすみぬま」は現在小学生7名の利用。(男子6女子1、また母が外国人家庭1)利用者数は15人くらいにしたいが、本当に利用してほしい方々に情報が伝わっていない。現在利用している7名はユースがやっているサッカー教室、学校、ビラなどを経由しているが、実際学校から紹介してもらうのは難しいと感じている。

一日の流れとしてはスタッフが小学校に迎えにいき、学童のように宿題をしたり、施設に面した畑で農作物を作ったり、どろんこ水遊びもでき、デッキでゆっくり過ごすこともできる。(将来的には目の前に公園もできる予定)。必要であればシャワーも使い、夕食も頼めば提供される(やどかりの里より)。そして、家まで送ってもらう。将来的には近くの学童とも連携して一緒にイベントなどやっていけたらと考えている。

日本財団からは建物建設費として6000万円出してもらった。その後3年は運転資金として一カ月80万円前後出してもらえるので2人雇用できる見込みだが、3年後はさいたま市からの支援をお願いしている。堀崎については自分達で運営していく。



<p>概 要</p>	<p>横浜市の「寄り添い型生活支援事業」「寄り添い型学習支援事業」は、国の施策である「子どもの学習・生活支援事業」の予算を使って国費で半分賄っている。この施策は国の予算も余っているようなので、さいたま市もぜひ活用を検討してほしい。</p> <p>子ども・若者支援における公益性については、事業者選定において一概に公平性を重視する意味で価格の低さだけでなく、内在する価値を測ってほしい。現在、学習支援と生活支援はワンセットである。さいたま市にもあと2か所ほど（岩槻区他）増やしていきたい。地域協働モデルとして、データを集め実践し、大学とも共同研究をし、さいたまから全国に広げていきたい。</p>
<p>参 考</p>	<p>市内の生活保護世帯の小中学生の数 887名 （2021年5月27日現在）</p>
<p>基本政策</p>	<p>4. すべての若者と子どもに夢とチャンスを 5. 社会全体で子育てを支えるまち</p>